石川淳全集

第四卷

石川淳全集　第四卷

筑摩書房版

増補 石川淳全集第四卷
昭和四十九年五月二十日第一刷發行

著　者　石　川　淳
發行者　井　上　達　三
發行所　筑　摩　書　房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話　東京(四)七六五一(代表)
振替　東　京　四　一　二　三

印刷　株式會社精興社
製本　牧製本印刷株式會社

(分類)0393(製品)73104(出版社)4604

石川淳全集第四卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第四卷目錄

さらば垣……七
常陸帶……二
末の松山……三九
ファルス……六七
合縁奇縁……八三
春の葬式……一三五
夢の殺人……一五五
他人の自由……一八一
蜘蛛……二一九
鷹……二三七
珊瑚……二九七

鳴神……三五七
虹……四一七
小公子……五四五
蜜蜂の冒険……五五七
乞食王子……五六七
アルプスの少女……五七七
白鳥物語……五八九
家なき子……五九九
愛の妖精……六〇九

さらば垣

『文藝春秋』昭和二十六年三月號

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十一郎にとつて空間は格子の網目でできてゐるといふかんがへが具體的に切實なものになつたのは、安見子の袂のはしで突然きびしく顔を拂はれたときからであつた。そのとき、いや、いつでもさうなのだが、安見子は家の裏門を出るとすぐ急な傾斜になつてゐる坂の下までいつしよに送つて來て、そこで十一郎が曳いて來た自轉車に乘るまへに別れの挨拶をしようとすると、さきは應へもなくついと背をむけて、足つきしなやかに坂の上のはうへのぼりかへして行つた。おもへば、いつでもかうであり、どうしてかうなのだらう。十一郎は女のやはらかい指をもう一度手の中にたしかめたいといふ強いきもちになつて、自轉車を片手におさへながら、あとを追はうとして、坂に一あし踏みかけたとき、吹きおろす風にながれて、はでな花模樣の袂の、炎のやうにひるがへつたやつが、まともに顔にあたつた。ぴしりと、平手打の音が頰に鳴つたのに似た。おもはず目をふさいで、立ちすくんだまま、とつさにひらいた目のかなたに、坂の上に、花模樣のうしろすがたはすでにのぼりきつてゐて、そこの門の中へと、たちまち消え入るとひとしく、しまつた扉のあふりの、しかし音はきこえないのに、てきめんに鳩尾にこたへて、十一郎は自轉車もろともあとずさりに地にすべつた。安見子がのぼりかへして行くとたんに、この坂の下にはそれを追ふことを禁ずるやうな透明な格子が立ちふさがり、また安見子のはうから十一郎の側に格

子をくぐり抜けて來たためしは無かつた。おそらく空間の構造は至るところこのやうに格子の網目仕掛になつてゐるのだらう。そして、人間も馬も自轉車もつねにはそれを見ることなく、格子の網目のあひだに出入し、あちこち驅けめぐつて、自由らしくまた柔軟らしく振舞つてゐるつもりなのだらう。しかし、因果なことに、その格子のかたちをまのあたりに見せつけられる仕儀になつたときには、ひとはそこに手も足も出ない。これが人間の運動のかならず突きあたるところだとすれば、十一郎と安見子との交渉の土壇場はこの網目にからまつてゐるのだらう。さういつても、さつき坂の上の家の、枯草の庭をあるきながら、安見子のつめたい小さい指を手の中にぎりしめてゐたあひだには、格子なんぞは目にちらつきもしなかつた。俗説に依れば、むかし遊女が客を送つて出て、そこよりさきには出られない垣のことを、さらば垣と呼ぶといふ。男女の仲では、どこかでひよつとさういふ垣にぶつかる羽目になるのかも知れない。十一郎は目のまへの透明な格子につかまるやうにして、坂の上のはうをふりあふいだ。格子の網目に邪險な袂の花模様がちらちらして、垣に花が咲いたやうに見え、それが次第にしろじろと、雪がふりかかつて來たやうに見えた。ふつと、つめたい小さい指でさはられたやうに、襟もとがぞくりとした。氣がつくと、いつのまにかほんものの雪がふり出してゐた。十一郎は自轉車に飛び乘つて、やけにペダルを踏みながら、巷のはうへ走り出した。

「あぶない。」

突然たれかのさけぶ聲がした。つづいて「おい、こら。」とどなる聲を聞いたとおもつたときには、すでに自轉車は四辻の角を乘り越え、鋪道に乘りあげて、そこの公園の鐵柵にあはやぶつ

からうとしたまぎはに、十一郎はやつと踏みとどまつて、よろめきながら、膝をついて、鐵柵につかまつた。そのほんものの鐵の格子に、ふりかかる雪を染めて、さつと赤い花の色がほとばしつた。指にふき出した血が手の甲にかけてながれてゐた。

「ばか野郎。」

巡査が驅けつけて來た。

「すみません。」

住所氏名をきかれた。

「商賣は。」

「生命保險の外交員です。」

「そんなやつがゐるから、生命があぶなくなるんだ。足もとに氣をつけろ。」

十一郎は足を曳きずつて公園のはづれにある喫茶店にはひつた。卷きつけたハンカチーフの下で、指の血はどうやら止まつたやうであつた。雪は夕ぐれの空にこまかく舞つてゐた。窓からながめながら、十一郎は雪の中にずつと遠く安見子の生命を見つめた。といふのは、そもそも安見子を知つたきつかけは商賣の生命保險に關係してゐたからである。ある日、十一郎は行きあたりばつたりに坂の上の家にはひつて行つた。職業上の臆面なさで、はじめての家の玄關にちよこちよこはひりこんで、ことわられないさきにすぐ扉をしめて、ごめん下さいと、相手を見てときには慇懃に、ときには押しつよく、あがり口に腰をおろして地歩を占めてしまふのがコツで、そこで辨當をひろげて茶でも出してもらふやうになれば一人前の腕といふものである。十一郎が辨當

をひろげるまでもなく、そのとき玄關に出て來た安見子はじつに簡單に保險への加入を承知した。さうですね、百萬圓ぐらゐにしておきませう。箒を賣りに來たやつがあるので箒を一本買つておくといふ調子であつた。それは利害の十露盤をはじく手數をかける代りに、いかなる申込をもつねに受諾する用意、いや、無方針があるといふに似た。青春のさかりの、死といふかんがへ、まして老といふぢぢむさいかんがへなんぞを受附ける隙間の無い生命にとつて、保險契約の生活上の意味ごときは無きにひとしく、約束したあとですぐ忘れてしまへばよいのだらう。しかし、毎月一度それをおもひ出させるために、十一郎が保險料をあつめに行くと、安見子はやつぱり無雜做に支拂つた。手は札束をつかむためのものではなく、それをすべり落すためのものと見えた。そして、十一郎がやがて札束よりも手のはうに心ひかれて、つとその手をにぎつたとき、安見子はおなじく無方針の受諾をもつて應へた。さういつても、こちらが手をはなせば、電流を絕つたやうに、敵の手はとたんに絕緣する。その手が位置し運動するところの生活の場はどのやうなものか、こちらの手をそこにふれることはできなかつた。おもへば、安見子の生命に關係する書類の作用に依つて、その手からすべり落される札束に毎月たつた一度接觸するといふことのほかに保險外交員の機能はありえない。十一郎にしても、敵の生活の中にまで立ち入らうとはおもはなかつた。しかし、わが手ににぎつたかぎりでは、敵の手はすなはちわがものである。手をにぎるといふことは愛情の行爲なのだから、すくなくともそれを振り切らずにゐるぐらゐの愛情の量は敵の手にもながれてゐるはずだらう。もし愛情の量について値をもとめうるとすれば、それはきつと變數に屬するにちがひない。そして、この變數の變域はずゐぶん廣大複雜であるにちがひな

い。おそらく、それは安見子の生命の神祕とともに測定すべからざるものなのだらう。十一郎はただわが手ににぎりえたかぎりに於て、敵のやはらかい指に祕められた愛情の値を定めたいとおもひ、しかもそれを定めるべき方法をぜんぜん見つけるあてすら無かつた。どこをさがせば、方法が見つかるのか。途方にくれた。目を伏せると、喫茶店のよごれたテイブルの上に、布を卷きつけたおのれの手が無器用に置いてあつて、そこに乾いた血の色が濃くしみ出てゐた。

「判らない方法をさがす方法といふものはちよつと見つかるまいね。」

さういふ聲が耳を打つた。十一郎はそれを心のつぶやきがしぜん聲に發したもののやうに聞きとつたが、しかしわが口からは決して聲を出してはゐないといふことに氣がついた。ぎよつとして、目をあげると、今まで他に客のゐなかつた喫茶店の、つい前のテイブルに、いつのまに來たのか若い男がひとり、たばこのけむりを吐きながら、横をむいて腰かけてゐた。人相はよくないが、いやにしやれた服裝をしたやつである。

「外交屋ふぜいが、身分不相應に、ふざけたまねをするなといふことさ。」

今度はあきらかに、その若い男がさういつた。ひとりごとのやうな口調ではあるものの、それはたしかにこちらにあてて發せられたことばに相違なく、したがつてさきに聞えた聲もやつぱりこの男の聲に相違ないと知れた。姿勢は横むきながら、するどくこちらを睨んでゐて、突き刺すほどの氣合であつた。

「きみは……」

なにものだと、十一郎がいひをへるひまもなく、敵はくるりとこちらにむき直つて、しかし依

然としてひとりごとのやうに、

「きみはだまつてそのうすぎたない手を引つこめればいいんだ。安見子にさはるな。ことばもかけるな。かんがへもするな。きみのなすべきことは、保險料をありがたく受取つたら、ぺこんとおじぎをして、すぐ尻尾を卷いて引きさがるといふだけのことだ。きみはどうしたつて犬の尻尾でしかないといふことを自覺するにかぎるね。」

「きみがなにものであらうとも……」

若い男はグレイの外套の膝に落ちたたばこの灰を輕く手で拂つた。その動作は十一郎のことばを拂ひのけるのとおなじ效果をもつた。十一郎はどもりながらくりかへした。

「きみがなにものであらうとも、ぼくのすることに、すくなくともぼくのかんがへることにまで干渉する權利は無い。」

「ふん。」

敵はそつぽをむいて、にやりと笑つて見せた。それはこれ以上輕蔑の示しやうがないといふ態度と受取れた。とたんに、十一郎は赫として一氣にかういつた。

「きみはいつたいなにものだ。ぼくは犬の尻尾でないまでも、なるほど保險屋の下つぱではあるさ。しかし、ある令嬢に任意に愛情をそそぐといふ權利はもつてゐるよ。これはじつに立派なことなんだ。きみがヨタモノであつても紳士であつても、これだけはみとめておくがいい。人間の生命といふやつは、かういふ單純なはたらきをするものなんだ。」

「おい。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com